

これならわかる💡 経済の仕組み 第1回

2013年2月28日

全2頁

お金の正体 (その1)

常務執行役員
岡野 進



経済の仕組みは複雑です。しかし、そのなかでお金など大切な経済の要素の基本的な働きを知ることによって、何が起きているのかをよく理解することができるようになります。

円高・円安、インフレ・デフレなど、お金や経済にまつわるニュースを耳にしない日はありませんね。これからの社会は、日本国内だけでなく世界的な規模でも経済変動が待ち受けています。そうした世界を生き抜く知恵として、基本的な経済の仕組みについて、いっしょに考えていきましょう。

現代の市場経済を成り立たせている基本の基本は、お金（貨幣）ということになるでしょう。みなさんは、お金といたら、何が思い浮かぶでしょうか？お札や硬貨などの現金ですか？たしかに現金はお金の基本ともいえるものです。

かつて紙幣（お札）が生まれる前は、お金といえば鑄造貨幣が当たり前で、その含有している金属の価値によってお金の価値が決まっていたのが普通でした。つまり、お金は文字通り金属の塊で、支払い手段として他のモノと交換できる、というところから始まっているのです。もとをたどると、物々交換が行われているうちに、特定のモノがお金の働きをしていったのです。日本ではかつて布が使われていたこともあるとされています。

重さを量って分けたり合わせたりすることができる金属は、様々な量にすることができ使いやすいモノだったので、金属で作られた鑄造貨幣が生まれていったのでしょうか。現存する最古の鑄造貨幣は紀元前7世紀頃にリディア王国（現在のトルコの辺りにあった）で作られたエレクトロン貨といわれています。当時、リディアはギリシャなどと地中海での貿易をさかんに行って、国同士で共通して使える貨幣が必要になってきたのだらうと考えられます。



日本では、奈良県明日香村で発掘された富本銭が銅銭として最古の铸造貨幣とされています。ただし、無文銀銭という銀銭も発掘されていて、その方が早かったとの説もあります。ただし、これらは国が発行したものかどうかはわかりません。8世紀初めに朝廷が、唐銭の開元通宝をまねて作った、円形方孔で大きさも重さもほぼ同じの和同開珎が、分かっている中で国が発行した一番古い貨幣です。その後、万年通宝、饒益神宝、延喜通宝、乾元大宝といった銅銭が発行されていきました。11世紀になると中国の銅銭が大量に入ってきて、国内でも中国の銅銭を使うようになりました。貨幣が同じだったので、中国との貿易には役立ち、中国は自分たちで発行した銅銭で日本から物品を輸入できたわけです。

銅はその1枚1枚の価値は高くないので、日常の生活用品の取引には十分利用できましたが、軍資金や大きな土木工事などの多額の代金支払いには少ない量でも価値の高い金や銀が必要でした。豊臣秀吉は天下統一を達成すると、各地の金山、銀山を手に入れ、天正大判をはじめ大小種々の金銀貨を铸造しました。徳川時代はこれを受け継いで、さらに全国に共通に通用する貨幣制度を制定し、金貨、銀貨、銅貨を幕府が独占的に発行するようになったのです。

いわゆるお札、つまり紙幣が初めて発行されたのは、中国の宋の時代の商人によって鉄銭の預り証として交子と呼ばれる手形が発行されたのが始まりとされています。日本では江戸時代に、各藩によってその領内だけで通用する藩札が発行されました。今で言えば、ある地域だけで使えるクーポン券のようなものだったのです。藩札は、幕府铸造の三貨（金貨、銀貨、銅貨）と交換できることを前提として発行され、とくに銀札が多く発行されました。しかし、三貨と交換できるのは、藩の外に持ち出すときに限るなど厳しい決まりがあったので、実際には藩の財政不足を賄う資金を調達するための手段としての性格が強かったといえるでしょう。



明治政府は1871年に「新貨条例」を公布しました。そこで単位に「円」が初めて採用され、日本初の洋式貨幣と貿易用の一円銀貨が発行されたのです。日本銀行は1882年、日本の中央銀行として設立され、開業から約3年後に銀貨と交換できる兌換銀行券として日本銀行券を発行し始めました。これで日本は円という基本単位によって経済が成り立つ国になったのです。

(以上)